

他者の願望のプロットとモノマニア的な主人公 - ハーディとブラッドンの小説におけるセンセーシ ョン的要素の考察ー

著者	鈴木 淳
雑誌名	東北工業大学紀要 理工学編・人文社会科学編
号	38
ページ	75-81
発行年	2018-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1241/00000065/



他者の願望のプロットとモノマニア的主人公 ーハーディとブラッドンの小説におけるセンセーション的要素の考察ー

鈴木 淳*

The Desire of Others and a Monomaniac Protagonist: A Consideration on Sensational Elements in Hardy's and Braddon's Novels

Jun SUZUKI *

Abstract

The aim of this study is to analyze the subversive plots in the sensation novels of Mary Elizabeth Braddon and Thomas Hardy. Firstly, by analyzing *Lady Audley's Secret* written by Mary Elizabeth Braddon, I am going to show that in the text the narrative plot of a main male protagonist is not a divine plot as he says, but is actually led by others' feelings of rivalry or desires for money. Next, I will consider *Tess of the d'Urbervilles* by Thomas Hardy from the same point of view. The narrator of the text tries to explain Tess's tragedy as retribution for the sin of her ancestor. Critics have also argued about the tragedy as such. However, there is another significant cause for Tess's tragedy which we should not overlook; it is undoubtedly Tess's mother Joan's strategy to support her own family by means of Tess's beauty. In this study, I am going to discuss the causes of Tess's tragedy and her murder of Alec in relation to Tess's slave-like situation to her mother's plot and Tess's resistance to the situation, respectively.

序

本論では、トマス・ハーディ(Thomas Hardy)の『テス』(*Tess of the d'Urbervilles*)におけるテスの悲劇の問題を、メアリー・エリザベス・ブラッドン(Mary Elizabeth Braddon)のセンセーション小説テキストの分析を通して、「プロット」という観点から考察する。センセーション小説というジャンルとハーディについては、これまでも「偶然」と「運命」という観点から論じられてきた。その際に興味深いのは、ウィニフレッド・ヒューズ(Winifred Hughes)の論であり、ハーディ小説の主人公たちは、偶然が支配する世界の中で、「意味」を見つけ出すために「パラノイアというメロドラマ的妄想」から自ら「運命」の物語を創造するという(179)。

しかしながら、そもそもハーディ小説の主人公たちの悲劇は、「運命か偶然か」という問題なのだろうか。そこには、新たな可能性として、悲劇

を引き起こす「他者の願望のプロット」が関係しているのではないか¹。さらに、ハーディの場合には、メロドラマ的妄想は主人公だけでなく、語り手についても当てはまるのではないか。

これらの疑問は、プロットという側面から、ブラッドンのセンセーション小説テキストの特徴を考察した際に浮かんだものである。実際に、「他者の願望のプロット」と「秩序を構築する主人公のモノマニア性」をブラッドンのセンセーション小説の特徴とした場合、「成長物語」と「悲劇」という大きな違いはあるが、そこには物語の権威を崩すストラテジーにおいて、ブラッドンとハーディの間の類似性が確認できる。したがって、本論では、はじめにブラッドンのセンセーション小説の特徴について論じ、そこからハーディ小説の新たな解釈の可能性について提示したい。

I

まずは、ブラッドンの『レディー・オードリーの秘密』(*Lady Audley's Secret*)について考察していく。先行研究で批評家たちが指摘する主人公ロバートの警察機能であるが、注目すべきは、パメラ・K・ギルバート(Pamela K. Gilbert)の論である。ギルバートは、「もし我々がロバートの物語の筋だけを考慮に入れた場合」(97)と前置きした上で、テキストではロバートが自らの成長物語として『オデュッセイア』に基づいた「エピック物語」を構築しようとしていると論じる(97)。しかしながら、ギルバートによれば、テキストにはロバートが克服すべきものがある。それは、愛に基づいた結婚という物語に隠された真実を語るレディー・オードリーの「女性の声」である(98)。その結果、ロバートは「公衆衛生的警察」となることで、「レディー・オードリーの主体性と物語を拒絶」し、「社会を健全な状態に回復させるためのあらゆる努力をする」(104-5)。

テキストにおけるジェンダーと権力の問題は、テキストのプロットの主導権の問題とも関係している。ギルバートは、論の中で、一見すると最後にロバートがレディー・オードリーを追放し、「社会を健全な状態に回復」したと述べているが、一方で、物語を完成させるロバートの「モノマニア」的な探偵捜査の中で、ロバートが「自身と社会の狂気性を感じている」ことにも触れている(94)。さらには、依然としてテキストにおける「他の物語の可能性」(105)も示唆している。このことから、ロバートの警察機能について、テキストの読み直しを行う必要性があると思われる。

本論では、従来の読み方と同様に、ロバートの女性の意味づけによる「警察機能」を見ていく。しかし、同時に注目したいのは、そうしたテキストが抱えるさらなる「秘密」である。それは、本当にロバートがプロットを主導する主人公なのだろうかということである。ギルバートは、ロバートが克服すべきものをレディー・オードリーの声としていたが、「他の登場人物たちの声」は関係していないのだろうか。というのは、テキストでは、他の登場人物たちの物語プロットが主人公の物語プロットの権威を転覆するからである。したがって、本論では、プロットの主導権の問題を、他の登場人物たちの「ジェンダー」、そして「階級」という観点からも考察する。

以下に、ロバートが自身の成長物語を語る上で、いかに探偵捜査を正当化しようとしているか、そして同時に、どのようにその正当化の根拠が崩されているかを見ていく。その結果、ブラッドンのセンセーション小説の特徴として「秩序を構築するモノマニア的主人公」と、それを崩す「他者の

願望の物語プロット」の二つの要素を提示し、それをもとに、ハーディ小説テキストの検討へと移っていききたい。

II

ロバートの探偵捜査は、友人ジョージの失踪とともに始まる。しかし、ローレンス・タライラック=ヴィエルマス(Laurence Talairach-Vielmas)は、「興味深いのは」と言い、次のように続ける。

Interestingly, the detective's quest seems to be directed towards investigating femininity more than towards conceiving a solution to the mystery of George Talboy's disappearance. [...] (123)

つまり、テキストでは、失踪したジョージではなく、始めから「女性性の捜査」を目的とした男性の警察的視点が働いている。タライラック=ヴィエルマスによれば、そこには、女性の「表面」と「潜在的なフェイク」の両方が想定されていて、ロバートは、それを「脱暗号化」し、「解剖」しようとしている(126)。テキストにおいて、こうした女性性の表面と深層を示すものとして批評家たちも指摘するのが、「ラファエロ前派の肖像画」である。その肖像画では、レディー・オードリーの目の中に「恐ろしげな光」が描かれ、口には「邪悪な装い」が付与される(*Lady Audley's Secret* 72)。ロバートは、その絵を見て嫌悪感を示すが、興味深いのは、その際の屋敷の主人の娘であるアリシアの態度である。アリシアは、「ラファエロ前派の画家には普通の人には見えないものが見える」と言い、レディー・オードリーについての悪魔的な描写を肯定するのだ(73)。

ジェニファー・ヘッジコック(Jennifer Hedgecock)によれば、肖像画を通して「女性への恐怖」と「女性を従属させることへの衝動」をロバートに植えつけたのは、アリシアである(121)。ヘッジコックは、アリシアにとってはレディー・オードリーが労働者から貴族階級への境界侵犯のために「汚染の危険」を孕んでいると論じる(127)。結局、ロバートも、この労働者階級に対する「悪しきものとしての扱い」や「非人間化」を受け入れる(127)。だが、この見方には、アリシア自身の「偏見や嫌悪感」(*Lady Audley's Secret* 11)が関係していた。というのも、アリシアは、レディー・オードリーによって父親の愛情を奪われ、屋敷においても権力を奪われていたのだ。つまり、ロバートの探偵物語には、レディー・オードリーに対するアリシアの個人的なライバル心も関係しているのである。

III

アリシアのライバル心によって始まったロバートの探偵物語であるが、その一方で、パメラ・K・ギルバートは、ミソジニア的なレディー・オードリーの秘密の捜査は、社会的な男性の役割を担うためにロバート自身の女性性の否定が目的だと述べる（95）。また、「ブルジョワのエピック物語」と解釈するリン・パイケット(Lyn Pykett)によれば、ロバートは、秘密の調査の中で法律に関するスキルを発達させ、男性性と職業を発見するという（103）。だが、ロバートによる捜査は、実際は女性であるアリシアの主導によるものである。さらには、男性の社会的アイデンティティを確立させるものではなく、むしろそれを不安にさせる。ロバートは、捜査に関して「モノマニアになるまで苦しめられるのか」（*Lady Audley's Secret* 149）と不安を感じるのだ。しかしながら、その際に注目すべきは、同時に強まっていくロバートの「キリスト教徒」としての意識である。

[...] The one purpose which had slowly grown up in his careless nature until it had become powerful enough to work a change in that very nature, made him what he had never been before – a Christian; conscious of his own weakness; anxious to keep to the strict line of duty; fearful to swerve from the conscientious discharge of the strange task what had been forced upon him; and reliant on a stronger hand than his own to point the way which he was to go. [...]

(159)

ロバートは、進むべき道に関して何度も「自分より強大な力を持った手」を口にする。また、しきりに「運命」という語句を用いる。こうして、ロバートは、いわば「神のプロット」を持ち出すことで、自らの捜査行為を正当化するのだ。

一方、テキストでは、失踪したジョージの妹であるクララが現れる。パイケットは、クララがブルジョワのエピックを動かす、ロバートにとっては「適切に社会化された男性性の基盤」であるという（104）。また、ナンシー・ノウルズ(Nancy Knowles)とキャサリン・ホール(Katherine Hall)は、ロバートが「自らを導く手」をキリスト教の神、あるいはクララとみなすことは「彼自身の動機をもっともらしく合理化する一方、その手はそれ自身を永続させるための父権制のシステムの力を表わしてもいる」と述べる（51-2）。だが、その描写はアイロニカルである。というのは、クララは、ロバートの物語のために現れたのではな

く、アリシアと同じく、自身のレディー・オードリーへの復讐のために、ロバートを利用しようとした。しかも、ロバートは行方不明のジョージの死体捜査を「恐ろしい義務」と呼び、そこからようやく解放されたと思っていたが、クララの声によって再び捜査へと引き戻されるのだ。

A gloomy shadow spread itself like a dark veil over Robert Audley's handsome face.

He remembered what he had said the day before at Southampton – “A hand that is stronger than my own is beckoning me onward upon the dark road.”

A quarter of an hour before, he had believed that all was over, and that he was released from the dreadful duty of discovering the secret of George's death. Now this girl, this apparently passionless girl, had found a voice and was urging him on towards his fate.

(*Lady Audley's Secret* 200)

つまり、テキストにおいて、ロバートは自身の成長物語の主人公ではなく、クララの復讐物語のプロットの道具にすぎない。ロバートが感じた「自分よりも大きな力を持つ手」とは、キリスト教の神ではなく、復讐の物語を語る「女性クララの手」であり、ロバートの運命はクララの声によって動かされているのである。

IV

最後にロバートはレディー・オードリーの監禁に成功する。その際には、医者診断による権威づけが行われ、「危険な女性」は国外に追放される。しかし、肝心の秩序は、回復されない。というのも、テキストには「井戸の中のジョージの死体をどうするか」という問題が残し、成長物語のプロットは動かないのだ。捜査の結果をクララに報告することもできず、ロバートは「これから自分はどうなるのか」（407）と考え込む。

しかしながら、クララの手紙によって、新たな展開となる。クララは、ロバートが火事から助けた、宿屋を経営するルークがロバートに会いたがっていると言う。こうして、ロバートは、再び「女性の手」によって動かされる。さらに、ルークに会うことで、ロバートは自分の物語の権威を転覆させられることになる。ルークの話は、ロバートがこれまで捜査してきた内容とは全く異なる、「ジョージが生きている」というものだった。

ロバートは、ルークの「奇妙な話」に、再び「神

の手」の存在を認める。これにより、再び物語のプロットが動く。しかしながら、実際には、ルークの告白は、二つの意味でロバートの成長物語の道徳的権威を崩す可能性がある。一つは、ルークの告白により、ロバートによるレディー・オードリーの監禁は、ナタリー・シュローダー(Natalie Schroeder)とロナルド・A・シュローダー(Ronald A. Schroeder)も指摘するように、危険な女性を閉じ込める正当行為から一転して、「不当行為」となる(54)。もう一つは、ロバートの成長物語の基盤が、それまでの権威的な医者診断から、下層階級労働者の金銭的欲望の告白へと変わったことである。

実際に、テキストで最後に明かされる秘密とは、ロバートの成長物語の根底には、レディー・オードリーに対する下層階級生活者の社会上昇の野心と金銭的欲望があったことである。この点については、エリザベス・ステアー(Elizabeth Steere)が、レディー・オードリーの召使いであるフィービーを「犯罪者としての召使い」(93)として論じている。フィービーは、レディー・オードリーが殺人を犯していないにもかかわらず、社会上昇を目論んで彼女を脅迫した(Steere 95-7)。そして、その夫であるルークは、レディー・オードリーから経済的利益を搾取するために、ジョージが生きていることを意図的に黙っていた(*Lady Audley's Secret* 422)。ロバートの成長物語を語るテキストを支配していたのは、そのような下層階級労働者の野心と金銭的欲望だった。

クララとの結婚で終わるロバートの成長物語は、一見するとハッピーエンドに見えるが、実際には、テキストは不安を抱えている。主人公が「運命」や「神のプロット」に言及する一方で、実際には、その物語は女性の復讐や下層階級労働者の金銭的欲望など、物語の道徳的権威を揺るがす他者の願望の物語プロットによって動かされていたのである。

V

以上がブラッドンのテキストの分析であるが、このブラッドンのセンセーション小説テキストの構造はハーディのテキストにも確認できる。もちろん、成長物語と悲劇というようにテキストのジャンルや内容は大きく異なるが、ロバートと同様に、ハーディのテキストに登場するユーステイシアやヘンチャードなどの主人公たちは、ヒューズの言うように、「パラノイア的」に「運命」を意識しているのである。

では、なぜハーディ小説の主人公たちは、運命を口にするのか。この点に関して、ジャネット・キング(Jeanette King)は虚無や無意味からの

「ある種の逃避」(124)をあげ、また、ヒューズもハーディ小説の主人公が「偶然」による支配よりも人格化された敵を必要としていると論じている(180-1)。このように、ハーディ小説の悲劇を論じる際には、主人公の悲劇は運命か偶然かのどちらかによるというのが前提であった。しかしながら、はじめにブラッドンを論じた理由がここにあるのだが、もし悲劇が運命でも偶然でもなく、ブラッドンのテキストのように、同じテキスト内の他の登場人物たちの物語プロットによって引き起こされた可能性が大きいとしたら、それはテキストにどのような影響があるだろうか。

そのことを念頭に置いて、以下に、『テス』を通して、主人公テスの悲劇の要因を再考したい。これまでもテス・オートゥール(Tess O'Toole)などによって、テスの悲劇はダーバヴィル家の先祖の罪に対する「因果応報」と論じられてきた。だが、ここで注意したいのは、テスの悲劇について因果応報の可能性を示唆しているのが語り手だということである。語り手は家系にまつわる逸話を挿入し、テキストの一貫性を構築していく。そうすることで、テキストで起こる出来事について、語り手は「意味」や「説明」を与えようとする。したがって、テスに起こったチェイスの森の事件について、次のような語り手の意見が述べられる。

Why it was that upon this beautiful feminine tissue, sensitive as gossamer, and practically blank as snow as yet, there should have been traced such a coarse pattern as it was doomed to receive; why so often the coarse appropriates the finer thus, the wrong man the woman, the wrong woman the man, many thousand years of analytical philosophy have failed to explain to our sense of order. One may, indeed, admit the possibility of a retribution lurking in the present catastrophe. Doubtless some of Tess d'Urberville's mailed ancestors rollicking home from a fray had dealt the same measure even more ruthlessly towards peasant girls of their time. But though to visit the sins of the fathers upon the children may be a morality good enough for divinities, it is scorned by average human nature; and it therefore does not mend the matter. (*Tess* 57)

テスの悲劇的な運命は、ダーバヴィル家の先祖がかつて少女たちに行った行為の因果応報と説明

される。しかし、注意したいのは、語り手がそのような道徳的説明を断言していないことである。因果応報の可能性を提示する一方で、語り手は、その道徳的秩序を目的とした解釈が「人情からは軽蔑される」ことも示唆している。

オートウールも述べるように、因果応報を基準とした読みは、語り手の「想像力の産物」、あるいは「解釈」である（82）。それに対して、オートウールは、因果応報の物語プロットを通して、逆にハーディが「フィクション」によって物語を形成する「ナラティブの強制」に「暗示的に異議を唱えている」と論じている（85）。しかしながら、ここで疑問が一つ残る。では、テキストにおいてテスを支配していたのは、「神々」でなければ誰なのか。その答えを明らかにすることは、この物語が「崇高な悲劇」であるというテキストの性格自体を問い直すことにもなる。

これらの問題を考えるには、テスがアレックのもとに向かった理由を確認する必要がある。それは、表面的には、テスが家族の大切な馬であるプリンスを殺してしまい、親戚であるというダーバヴィル家に助けを求めに行ったというものである。しかし、重要なのは、テキストには親戚のダーバヴィル家やプリンスの死よりも先に、母親ジョーンによる「縁組みの物語プロット」が言及されていたことである。

[...] Being mentally older than her mother she did not regard Mrs Durbeyfield's matrimonial hopes for her in a serious aspect for a moment. The light-minded woman had been discovering good matches for her daughter almost from the year of her birth. (*Tess* 35)

注目すべきは、テキストで母親ジョーンは、テスが「生まれたときから娘のための良縁を探していた」と語られることである。すなわち、テスの人生、そしてテキストを支配しているのは、「娘の良縁探し」という母親の願望の物語プロットなのだ²。

しかも、ジョーンにとって、「切り札」となる自分譲りの肉体を持つテスの結婚は、娘の幸せというよりも、むしろ家族を経済的に助ける手段だった。実際に、テスを気に入ったアレックは、テスの父親に新しい馬を送り、兄弟たちにはおもちゃをプレゼントする。しかし、母親の計画に反して、テスはアレックと結婚するどころか、アレックの元から戻ってくる。そのとき、テスとジョーンの間では、次のような会話がなされる。

“And yet th’st not got him to marry ’ee!” reiterated her mother. “Any woman would have done it but you, after that!”

“Perhaps any woman would, except me.”

“It would have been something like a story to come back with, if you had!” continued Mrs Durbeyfield, ready to burst into tears of vexation. “After all the talk about you and him which has reached us here, who would have expected it to end like this! Why didn’t ye think of doing some good for your family instead o’ thinking only of yourself? See how I’ve got to teave and slave, and your poor weak father with his heart clogged like a dripping-pan. I did hope for something to come out o’ this! To see what a pretty pair you and he made that day when you drove away together four months ago! See what he has given us – all, as we thought, because we were his kin. But if he’s not, it must have been done because of his love for ’ee. And yet you’ve not got him to marry!” (63-4)

そこでは、ジョーンは、アレックを夫として捕まえておかなかったテスに対して、「どうしてテスが自分のことだけで、家族のことを考えないのか」と非難する。また、後のエンジェルとテスの結婚についても、ジョーンの経済的欲望の物語プロットが関係している。テスのエンジェルへの過去の告白を阻んだのは、ジョーンの手紙に書かれた忠告であった。テスは、母親の「黙っているように」という忠告に従う。このように、テスの悲劇は、ジョーンが主導する「良縁探しの物語プロット」に関係していた。

テキストにおける「因果応報」という見方を「パロディ化」する「怠惰な両親に搾取される若い女性」という見方については、オートウールも指摘している（78）。だが、オートウールは、経済的制約が他の登場人物たちにテスの悲劇の原因として受け取られていないと言い、また、「時々テキスト自体が因果応報を支持している」と述べる（80-1）。実際に、語り手は、ダーバヴィル家の馬車の伝説やダーバヴィル家の先祖の肖像画のエピソードを持ち出し、テスのエンジェルに対する背信行為とダーバヴィル家の先祖の罪を重ねる。そうすることで、テスの悲劇を因果応報として解釈しようとする。このように、テキストでは、「母親の経済的欲望の物語プロット」と「語り手の言う因果応報の物語プロット」が同時に存在し

ているのである。

だが、終始テキストの根底において主導権を握っているのは、母親ジョーンのプロットの方である。テスを最終的に悲劇へと向かわせるテスとアレックの再会も、やはり母親によるテスの操作が関係していた。実際に、テスがエンジェルと別居し、ダービーフィールド一家がマーロットの村を追出されたとき、ジョーンは、前回と同じようにテスを非難する。

Joan drew the curtains round the bed so as to make an excellent tent of it, and put the smaller children inside. "If it comes to the worst we can sleep there too, for one night," she said. "But let us try further on, and get something for the dears to eat. O, Tess, what's the use of your playing at marrying gentlemen, if it leaves us like this?" (*Tess* 286)

その少し前から、テスは、アレックによって家族の経済的困難を指摘されていた。アレックは、テスの母親を訪れ、経済的な話し合いをしようとする。アレックは、テスに「君が判断することじゃない」(280)と言うように、ジョーンがあらゆることについての決定権を持っていることを知っていた。逆に言えば、テスには決定権がないのだ。つまり、テキストでは、依然として、テスはジョーンの経済的欲望の物語プロットの道具なのである。

だが、テキストにおいて、ジョーンの経済的欲望のプロットは、成功していない。というのは、ジョーンの物語は、テスが経済的基盤であるアレックを殺害することで終わりを迎えるからである。さらに、この殺人により、テスは、今度は、語り手の言う「ダーバヴィル家の因果応報の物語」に組み込まれることになる。実際に、テスは、以前から話に聞いていた「ダーバヴィル家の馬車の伝説」を意識させられていた。また、恋人エンジェルも、テスの殺人とダーバヴィル家の血筋を結びつける。こうして、テキストでは「因果応報」という権威的プロットの構築がなされ、その結果、ダーバヴィル家の罪への「正当な処置」としてテスは処刑され、道徳的秩序が回復される³。

しかし、テスによるアレック殺害は、本当にダーバヴィル家の運命と関係があるのだろうか。重要なのは、『テス』の執筆の構想に際して、ハーディが次のように述べていたことである。

wish to kill the husband; she wishes to kill the situation. [...]” (*Early Life* 289-90)

ここから考えると、テスはアレックを殺したかったのではなく、あくまでも自分が置かれた「状況を消したかった」ことになる。では、「テスが置かれた状況」とは、どのようなものだったのだろうか。その状況とは、テスが家族を養うためにアレックとの生活を強要されていたことだった。つまり、それは、テスがジョーンの「良縁探しの物語」のプロットに従っている状況である。しかし、テスは、最後に母親の経済的欲望の物語の基盤であるアレックを殺害した。テスは、表面的には因果応報の物語に組み込まれ、「神々」の犠牲者として処刑されることになる。しかし、実際には、アレックの殺害は、ダーバヴィル家とは全く無関係であり、むしろそれは、ジョーンの経済的欲望の物語へのテスの「セクシュアリティ」による抵抗によって起きたのだった。こうしてみると、ジョーンの「私は決して本当にはテスを理解したことはなかった」(*Tess* 295)という言葉が指していたのは、テスに内在する破壊的なセクシュアリティの力であったことが分かる。

結論

以上が、ブラッドンを通したハーディのテキストの分析である。ブラッドンのテキストでは、ジェントルマンの成長物語は、女性の復讐や下層階級労働者たちの金銭的な欲望の物語を基盤としていた。また、ハーディのテキストでは、テスの悲劇の原因がダーバヴィル家の罪への因果応報ではなく、母親の経済的欲望の物語と、それに対して抵抗するテスのセクシュアリティであることが明らかになった。重要なのは、ブラッドンとハーディの両者のテキストにおいて、それぞれの表向きは道徳的秩序の物語が、実際には、テキストに同時に存在する女性同士のライバル関係や下層階級の経済的欲望、そして女性のセクシュアリティなど、すべてセンセーション小説の要素によって成り立っていることである。このように、ブラッドンとハーディのテキストでは、主人公や語り手が意図した道徳的な物語の権威が、一見すると確立しているように見えるが、実際には、センセーション小説的要素によって根底から崩されているのである。

注

“When a married woman who has a lover kills her husband, she does not really

*本研究は2013年～2015年にJSPS科研費(25770112)の助成を受けた研究成果の一部であ

る。また、本稿は、日本ハーディ協会第 58 回大会（於：戸板女子短期大学 2015 年 11 月 28 日（土））において、「他者の願望のプロットとモノマニアの主人公—ブラッドンを通してハーディ小説のセンセーション小説的要素を考察する—」と題して行った口頭発表の内容に一部加筆・修正したものである。

1. もちろん、ハーディ小説の主人公の悲劇の原因を論じる際には、ロイ・モレル(Roy Morrell)などが主張する「責任」の問題も重要である。しかし、本論のテーマは、あくまでもテキストに見られる他者の願望のプロットという観点からのハーディの「センセーション小説」の特徴の分析であるため、ここでは主人公の責任の問題は扱わない。

2. この「母親の良縁探し」については、小林千春も、「母親の思慮に欠けたこの企みの責任は重い」(216) と言い、テスの悲劇の原因の一つとして論じている。

3. 『テス』のテキストでは、テスの処刑に関して、“Justice” was done’(314)という表現が用いられている。

参 考 文 献

- Braddon, Mary Elizabeth. *Lady Audley's Secret*. Ed. Jenny Bourne Taylor. London: Penguin, 1998. Print.
- Gilbert, Pamela K. *Disease, Desire and the Body in Victorian Women's Popular Novels*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997. Print.
- Hardy, Florence Emily. *The Early Life of Thomas Hardy, 1840-1891*. 1928. Cambridge: Cambridge University Press, 2011. Print.
- Hardy, Thomas. *Tess of the d'Urbervilles*. Ed. Scott Elledge. 1965. New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1991. Print.
- Hedgecock, Jennifer. *The Femme Fatale in Victorian Literature: The Danger and the Sexual Threat*. Amherst: Cambria Press, 2008. Print.
- Hughes, Winifred. *The Maniac in the Cellar: Sensation Novels of the 1860s*. Princeton: Princeton University Press, 1980. Print.
- King, Jeannette. *Tragedy in the Victorian Novel: Theory and Practice in the Novels of George Eliot, Thomas Hardy and Henry James*. 1978. Cambridge: Cambridge University Press, 2010. Print.
- Knowles, Nancy, and Katherine Hall. “Imperial Attitudes in *Lady Audley's Secret*.” *New Perspectives on Mary Elizabeth Braddon*. Ed. Jessica Cox. Amsterdam: Rodopi, 2012. 37-58. Print.
- Morrell, Roy. *Thomas Hardy: The Will and the Way*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press, 1965. Print.
- O'Toole, Tess. *Genealogy and Fiction in Hardy: Family Lineage and Narrative Lines*. Basingstoke: Macmillan, 1997. Print.
- Pykett, Lyn. *The 'Improper' Feminine: The Women's Sensation Novel and the New Woman Writing*. 1992. London: Routledge, 2006. Print.
- Schroeder, Natalie, and Ronald A. Schroeder. *From Sensation to Society: Representations of Marriage in the Fiction of Mary Elizabeth Braddon, 1862-1866*. Newark: University of Delaware Press, 2006. Print.
- Steere, Elizabeth. *The Female Servant and Sensation Fiction: 'Kitchen Literature.'* Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2013. Print.
- Talairach-Vielmas, Laurence. *Moulding the Female Body in Victorian Fairy Tales and Sensation Novels*. Aldershot: Ashgate, 2007. Print.
- 小林千春 「苦悩するヒロインたち——複雑化する母子関係——」『大榎茂行教授喜寿記念論文集 イギリス文学のランドマーク』 大阪教育図書、2011 年、213-24. Print.